

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 ハイデガー『存在と時間』における実存と真理

氏 名 森永 駿

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、マルティン・ハイデガーの『存在と時間 (*Sein und Zeit*)』(1927年)における真理論を検討することで、真理概念としての「開示性 (*Erschlossenheit*)」の内容とその位置づけを明らかにすることを目的としている。開示性とは、われわれ各自がそれであるところの存在者、すなわち「現存在」の本質的性格である。したがって分析の対象は現存在となる。本論では、現存在の存在構造である「世界内存在」の分析から着手している。

第1章では、世界内存在の「世界」概念の分析を行う。それに先立ち、われわれ現存在が日常生活でかかわっている存在者が「道具」(道具的存在者)であること、道具に「適所性」が含まれていることが取り出される。つぎに、適所性が世界の構造である「有意義性」として捉え直される。われわれ現存在がその内で慣れ親しみつつ滞在している世界とは、有意義性という構造を持つということが明らかになる。最後に、われわれが世界の内で出会い得る道具以外の存在者として、他者(他の現存在)が扱われる。われわれが他の現存在に出会うことができるのは、現存在の存在に「共存在」が含まれているからであり、われわれは絶えず他の現存在と「顧慮的気遣い」という仕方がかかわっているということが明らかになる。

つづく第2章では、世界内存在の「内存在」の分析を行う。内存在とは、慣れ親しんでいる世界のもとに滞在していること、という現存在の存在を示していることが明らかにされる。この内存在は、われわれ現存在が本質上備えている「開示性」によって可能となる。したがって、われわれの分析は内存在から開示性へと移行する。そして開示性が「情態性」、「理解」、「語り」から構成されていることが明らかにされ、これらの構成契機を一つずつ順に検討していくことになる。以上の情態性、理解、語りは、一般的開示性を構成するものである。しかし、ハイデガーが自身の分析の出発点として選んでいるのは、われわれの普段のあり方、すなわち日常性である。したがって、開示性の日常的な様態が分析され、「空談」、「好奇心」、「曖昧性」が取り出される。

つぎの第3章では、世界内存在として存在する「存在者」が分析される。そのなかで、われわれ

現存在の存在が「気遣い」として捉え直され、さらにそこから時間的構造である「時間性」が取り出される。つづいて現存在の根本様態である「本来性」と「非本来性」に議論が移され、これらの様態が可能であるのは、現存在に「各自性」と「可能性を存在する」という性格が含まれているからであるということが明らかにされる。その後、「本来性」と「非本来性」の内容がそれぞれ吟味され、第3章の最後には、これらの様態の変化が時間性の時熟の仕方の違いであることが示される。

最後に、第1～3章までの議論を踏まえつつ、『存在と時間』第44節における真理論が検討される。伝統的な「合致」という真理現象から分析は出発し、その可能性の根拠として「発見」と「開示性」という真理概念が新たに取り出される。これらの真理概念のうち、本論では特に「開示性」に議論の焦点を絞って吟味を行う。そして、ハイデガーの記述を整合性を保ちつつ解釈するためには、「開示性」概念を、「広義の開示性」と「狭義の開示性」と二義的に解釈しなければならないことを示す。これらのうち、狭義の開示性については、第1～3章の議論を踏まえつつ、真理基準が明確に設定可能であり、真理と呼ぶに足りうることが示される。一方、広義の真理に関しては、われわれは「真(理)」しか問うことができず、真理基準を見いだすことができないということが示される。